

Title	同好會報 (大阪天文展覽會記念)
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1921), 1(7): 120-120
Issue Date	1921-05-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/159569
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

同好會報

天王寺博物館の天文展覽會が目的とした學術の普及といふ問題は、我が同好會も亦其の設立當初から目的としてゐたので、此の機會に會の活動が特に盛んであつたことは勿論である。殊に山本助教は三月十九日より三日間大阪支部を援助して講習會に『新時代の天文學』を講ぜられ、展覽會を観覽する人々のための準備教育をせられた。それから展覽會の開期中の毎日曜定期講演は必ずしも同好會の事業でないとしても、之れが會の宣傳に役立つことは言ふまでもない。又

古賀和吉氏(大阪支部幹事)が展覽會開期中、一般觀覽者のために通俗講演をせられたこと、

宮森作造氏(大阪支部幹事)が陳列上の種々援助をせられた勞、

水野千里氏(岡山支部幹事)がはる／＼諸種の陳列品、殊に岡山天文臺の計畫關係圖類を送られたこと、又

百濟理學士が東京にゐて、いろいろ好い材料を提供せられたこと等は特筆すべき事柄である。

會は豫告の如く、四月二十四日午後二時、博物館階上に於いて

記念臨時總會を開いた。其の順序は先づ山本助教の講演「太陽系の現勢」(別頁所載)があり、それから別室で茶話會に移つた。此の席に出たのは大阪の會員が大部分であつたが、尙其他にも神戸、明石岡山方面からも熱心な人々が來會せられ、京都からも大勢が參加したから、總計五十名に達した。席上、先づ古賀幹事の挨拶古川幹事の報告、山本幹事の演説あり、特に山本氏は日本現今の天文學界を論じて、將來大に發達すべき使命を痛説し、若き熱心家の奮起せんことを訴へた。それから、質問あり、諧謔あり、主張あり、近來最も愉快なる會合であつた。

會は今や八箇の支部を有し、會員は全國にわたつて、總計八百を越えた。近く一千名の關を越えるだらうと期待されてゐる。

は今より十數年前、ドイツ國ドレスデン市のハイデ會社から買つたもので、焦點距離は「メートルセ、据付はフラウンホーフェル型の所謂獨逸式である。之れに赤經赤緯の兩軸に沿つて細い度盛環があり、金と微動裝置が備はつて居る。倍率は接眼鏡の入れ代へによつて、五十倍から二百五十倍まで變へられる。島島へ行つて、上田理學士が日食を觀測したので此の器械であり、又故佐々木氏が日本最初の彗星發見をしたのも亦實に此の器械である。

自分は日頃、學生教授用のため大小の望遠鏡の木製模型を作つた。之れも亦數個陳列してある。先づ世界的大望遠鏡としては、米國エルクス天文臺の大四十吋それから同國ウイリソン山の六十吋と百吋の兩反射望遠鏡、及びカナダのダークトリアに新しく建設された七十二吋の寫真鏡などは、構造は木製であるけれども、主要部は皆漏らさずに模してあり、又、實際の器械と同じやうに運轉することも出来るので、教育用には充分役に立つ。尙其の外に、標準的天文器械として、子午環や子子儀や天頂儀も出品した。之れ等も皆、圖で其の形を知るよりも、模型の方が遙かに好いと信じてゐる。

塲の北隣にある廊下に沿ふたのぞき眼鏡中には、世界的天文臺十數ヶ所の寫真を見せ、同時に我が日本にある只三ヶ所の天文臺の寫真をも列べて、觀覽者の參考に供した。米國のエルクスやウイリソン山覽者の壯大な設備と、それ等の十分の一に足りない貧弱な我が國の天文臺とを比較して見るさ、いかに我が國の學術が振はない有様が明瞭である。四吋赤道儀の向ひにも、世界的大望遠鏡の大きさと、其の分布とを圖と表とにして表はして見た。こゝにも亦我が國の器械力のあはれさが見えて居る。(終)